立命館大学日本文学会創立の頃

芦谷信和

一九五二年に立命館大学文学部二部日本文学専攻三回生に編入学を許可された。

当時は学制改革の時期で、所謂六・三・三制が発足し、中学三年が義務教育になり、その上に三年間の高等学校が置かれた。二部には旧制高等師範学校をはじめ、旧制専門学校（現在の各種学校ではなく、大学と列んで正式な高等教育の学校）や師範学校（小学校教員を養成する中等教育の学校）を卒業して、旧制中学（五年制）や小学校の教職に就いていて、夜間は新制大学の学生として、新制度の教員免許状を取得するために在学している人が多かった。それらの学生達は向学心が旺盛で、大学で初めて研究に興味を見出し、研究心を向上していって、大学院へ進学する人もあった。そのような研究心の高まりから、その研究成果を訊いたいとする意欲が澎湃として湧き上がり、自分たちの研究発表の場とその機関誌を作りたいという願望が一気に膨らんできた。これらの在学生が先輩の卒業生と共に、委員会を結成し、当時ただ一人大学教員であられた立命館大学助教授の和田繁二郎先生を委員長に押し立てて、当時の日本文学研究会を卒業生にも拡大して、日本文学会を結成し、『論究日本文学』が創刊されたのである。当時の委員は岡本彦一、田中松太郎、小島孝三郎、大橋清秀、土岐武治、水田潤、浅野達三、鈴木弘道等々三十余名に及ぶ。折から清水泰、後藤丹治両先生が揃って還暦を迎えられ、その祝賀会が教えを受けた多くの卒業生、在校生によって盛大に催され、両先生と宮嶋弘先生の三教授が顧問に推戴された。一九五四年に学部を卒業して助手になられた森本修氏が総務として、実務の中心に就かれた。当時は卒業生は原則として、在学生は全員が会員として授業料と共に会費を納入し、『論究日本文学』は全会員に配布された。翌年には会長制となり、当時の主任教授清水先生が会長に就

かれ、後藤丹治博士は大阪学芸大学に転任されて、宮嶋先生が副会長という布陣が成立したのである。

その後一時、学園紛争で発行が滞った時期があったが、その間にも場所を移して研究会や談話会は続けられ、やがて会誌も復活して、爾来、会員の研究成果の舞台となり、多くの研究者、大学教員を輩出して、学界の進展に寄与して来たのである。

（あしや・のぶかず　本会名誉会員）